

森 林太郎 (もり りんたろう) —————

石田 順房

(東京都立大学都市研究センター教授)

高名な文学者・文芸評論家であるが、軍医・公衆衛生学者でもある。公衆衛生の立場から都市論ともいえる数多くの論文を書いている。鷗外あるいは鷗外漁史は筆名。1862年に現在の島根県津和野町で生まれた。父静男も津和野藩の医師であった。1872年上京、1881年に東京大学医学部を卒業、陸軍に入って軍医となる。1884年8月より1888年9月までドイツに留学し、ペッテンコーファー、コッホなどに師事し公衆衛生学を学ぶ。当時、ペッテンコーファーとコッホは、コレラの原因をめぐって論争中であり、ペッテンコーファーは防疫のための都市下水道の必要性を特に強調していた。

留学中の1888年5月26日にベルリン人類学会例会で行なった講演のとき配付した”Ethnographisch-hygienische über Wohnhäuser in Japan”が森林太郎の都市論に関する最初の論文となったが、帰国後、その年の12月に、この論文の日本語抄訳ともいえる「日本家屋説自抄」を読売新聞に発表して、「戦闘的啓蒙家」として華々しく登場する。鷗外の文学的仕事の最初は、1889年1月の「小説論」および翻訳戯曲「音調高洋箏一曲」である



から、それよりも早い。

森の都市論は大別すると都市計画・市区改正論と建築衛生・建築規則論とに分けられる。前者のグループに属するものとしては「市区改正ハ果シテ衛生上ノ問題ニ非サルカ」「市区改正論略」および衛生新篇に収録の「都市」など、後者に属するものとしては「日本家屋説自抄」「屋制新議」「屋式略説」「造家衛生の要旨」「壁湿説」などがある。また、ミュンヘンの下水道の事績を紹介する「衛生都城之記」などもある。これらの論文は、ドイツを中心とした欧米の最新知識を紹介しつつ、当時の市区改正論の主流をなしていた「中央市区論」「貧富分離論」などに鋭い批判を加えていたのが特徴である。

森の都市・建築に関する実際的仕事としては、東京市区改正委員会建築条例取調委員として、東京市家屋建築条例の制定に取り組んだことがあげられる。しかし、この条例制定は1895年頃中断され、森自身の短かった都市・建築論への取り組みもこの頃で終わる。なお、その後の仕事に、衛生学書『衛生新篇』の中の「都市」があり、その中の「新街造設ノ計畫」は、1914年の第5版で初めてまとまった形を取るが、その内容、発表の時期から、日本で最も初期の都市計画教科書ということも出来る。